

# アメリカの人種問題を考えるための五冊

奥田 俊介

二〇二〇年の米国は、新型コロナウイルス感染拡大による大きな混乱から、本稿執筆時（十一月半ば）においても未だ勝者が確定しない大統領選まで、激動の一年となった。その中の出来事の一つに、大阪なおみ選手がテニスの全米オープンにて黒人差別の被害者の名前を入れたマスクを着用して試合に臨んだことが大々的に報道され、日本人にとっても関心事となった運動、「ブラック・ライヴズ・マター（Black Lives Matter, BLM）」がある。

二〇二〇年二月、フロリダ州にて黒人高校生が自警団の男性に不審者とみなされ射殺された事件で、犯人に正当防衛が認められ無罪になった。これを知った黒人女性アリシア・ガルザ氏がSNSに“Black people, I love you. I love us. Our lives matter, Black lives matter”とこう投稿を行い、ハッシュタグ「#BlackLivesMatter」として拡大されたことが、BLMの始まりである。二〇一四年には、取締りという形で黒人の命を奪った白人警官が罪に問われない事態が既に多発していたが、本年五月には、ジョージ・フロイド氏がミネソタ州ミネアポリス近郊で白人警官に首を膝で押えられ死亡する事件が発生するに至った。この事件をきっかけに、ミネアポリスから反人種差別デモが全米へ拡大することとなった。このような黒人差別に対する権利獲得のための闘争は、リンカーン大統領の

奴隸解放宣言や、二〇世紀半ばの公民権運動などを通じ、広く知られている。

米国は、建国時から現代に至るまで、多様な地域的起源を持つ人間からなる国である。建国時に多数派であったアングロ・サクソン系のほか、ジャガイも飢饉以降急増したアイルランド人、ゴールド・ラッシュに伴い来訪した華僑、開国後にハワイや東海岸にやってきた日本人、一九世紀後半にやってきた「新移民」と呼ばれる南欧・東欧系移民、一九六五年移民法改正による「国籍割当制」廃止に伴い増加した中南米諸国からの移民、紛争から逃れた難民など、その構成は他に見えないほど多様であると言えよう。そして、大規模農業の労働力として連れてこられた奴隷を主たるルーツとする黒人、先住民たるネイティブアメリカンを忘れてはならない。

注意すべきは、一九世紀末以降の黄禍論に伴い「帰化不能移民」として迫害を受けた中国人や日本人に加え、白い肌を持つにもかかわらず旧移民文化や低賃金労働の機会を脅かす恐れがあるとして迫害の対象となった新移民のように、米国史における「人種」問題とは、単純な「白人／黒人」の二項対立として考察できるものではないということだ。本稿では、このように複雑な諸相を見せる米国の「人種」問題について知る事

のできる文献を、比較的手に入りやすいと思われるものを中心に五冊紹介する。元より、米国に存在する全てのエスニシティについて言及することは不可能であり、その意味もないであろう。包括的な研究書に加え、大きく扱われることの多い「黒人」「白人」「中南米からの移民」に関する書籍を紹介し、日本とも関係の深い「日系人」についての文献も紹介したい。

① 川島正樹編

『アメリカニズムと「人種」』

名古屋大学出版会（二〇〇五）

米国が当初より様々な地域をルーツとする人間によって建設されてきたのは冒頭で述べたとおりであるが、黒人差別に代表される「人種差別」とは、そもそも建国当初から存在したのだろうか。それがいずれかの時点で生まれたとして、生得的な差は存在しないと証明された現在でも、なぜ人種差別は存在し続けるのか。

本書は、このような疑問から、「自由」や「民主主義」と『普遍的価値』を追求し実現するシステムとしての『アメリカニズム』が、『人種』が象徴するある種の不平等正当化論を『例外』としてきたというよりも、むしろ当初から不可分のものとして発展し……『人種』概念はよりいっそう『普遍』の装いを凝らしながら再定義され続け、それが今やグローバル化しつつある段階に到達している」という仮説を提示する。アメリカ史の理解のみならず、グローバル化（北アメリカニズムの拡大）と共に進展する世界各地での分断をも同時に視野に入れ、対処法を模索するという野心的な意図からなされた研究の集成である。

第一部では、黒人やネイティブアメリカン、中国人及び新移民等が米国でいかに「人種」化され、場合によっては迫害されてきたか、その政治的背景を通史的な観点から考察している。第二部では、現代の米国社会において「人種」と関わりの深い問題である住居や教育、結婚、スポー

ツに関する現状考察がなされたのち、なぜ米国には差別を是正する動きに対する反動が発生するのか、二一世紀の米国はいかにあるべきかという考察が、米国内政治の視点、及びアバルトヘイトを廃止した南アフリカとの比較を通じてなされていく。

二〇〇五年に出版された本であるため、二〇一四年以降の黒人殺害事件やBLMに関する言及は存在しないが、米国に存在する「人種」を巡る現代の諸問題を考察するための視野を涵養するには、本書はうってつけの一冊であろう。各章の内容は非常に濃く、通読するには相当の時間がかかるかもしれないが、それに見合う深い史的理解が得られることを保証したい。

② タナハシ・コーツ著、池田年穂訳

『世界と僕のあいだに』

慶応義塾大学出版会（二〇一七）

コロナウイルス下においても、冒頭で述べたようなBLMに関する街頭での活動は続けられている。米国史上において最多の死者を出した南北戦争を筆頭に、黒人を取り巻く諸問題は、建国以降常に重要な政治ファクターとして存在し続けてきた。しかし、公民権法及び投票権法を通して黒人が政治的権利を回復した今でも、フロイド氏のように路上でなすすべなく命を奪われてしまうケースが後を絶たない。現代の米国における「黒人」の立ち位置とは、どのようなものなのだろうか。

本書は、Ta-Nehisi Coates による *Between the World and Me* (Spiegel & Grau, 2015) の翻訳である。タナハシはアフリカ系アメリカ人のジャーナリストであり、メリーランド州ボルティモアで生まれた。本書は、まもなく一五歳の誕生日を迎える息子に対する手紙という形で書かれたタナハシの自伝的な作品である。現在でも全米有数の犯罪多発地帯であるボルティモアだけでなく、米国そのものにおいて「黒人」として生きることが如何なる意味を持ったかを、「肉体の運命」という言葉をキーワー

ドに、生々しく明らかにしている。

本書では、黒人が米国においていかにたやすく肉体を破壊される可能性が存在しているかということが、子供時代のストリートでの銃との邂逅による「死」の恐怖の体験や、大学時代の恋人の兄が警察に殺され、警官が無罪になったこと、その直前にタナハシ自身も警察に理由も説明されず車を停車させられた経験をしたエピソード等と共に語られる。そして、このような黒人の肉体の破壊は、奴隷制を維持するために奴隷に対してなされた峻烈な暴力行為から続く米国の「遺産」だとし、タナハシ自身もその「構造」を理解するよう父親から暴力により「教育」されたことを回想する。ここには、川島の前掲著で仮定された「アメリカに埋め込まれた『人種差別』」とも共通する要素が見える。タナハシは、米国人が「人種」が自然に存在すると信じ、米国の人種主義とは自らを「白人」と信じるよう育てられた人間が作り出したヒエラルキーの問題で、新しい考えであると主張する。白人が白人であることを自認するためには、黒人等の迫害、すなわち「略奪」が欠かせないものだったと主張される。

二〇一四年や二〇二〇年に複数発生した警官による黒人殺害事件が、決して一過性のものでなく、黒人の身体の危機は米国のどこにでもいつでも存在することが、本書を通してまざまざと示される。史的・政治的背景を緻密に研究した前掲著と本書を合わせて読むことで、米国に根付く黒人差別の「構造」について、より重層的な理解が可能となるであろう。

### ③ 渡辺靖著

#### 『白人ナショナリズム―アメリカを揺るがす「文化的反動」』

中公新書 (二〇二〇)

米国の黒人差別問題について知る一方で、それだけでは、特に二〇一六年に吹き荒れたトランプ旋風の内幕を理解することはできない。二〇

一七年にヴァージニア州シャーロッツビルで起こった白人至上主義団体による集会及び反対派に対する車突入事件、そしてトランプ大統領が「双方に責任がある」と述べた背景を理解するには、米国で多数を占める白人の中でも、特に反移民や反LGBT等を唱え、中には悪名高いクー・クラックス・クランの流れを汲む団体も含む「白人ナショナリスト」たちの主義主張を知ることが欠かせないであろう。

本書は、『アメリカン・コミュニティ』や『アメリカン・デモクラシーの逆説』等で現代の保守／リベラル、富裕層／貧困層の間で分裂する米国社会の実態を描いてきた慶應義塾大学教授の著者が、リベラルな国際秩序・社会体制を批判し、米国第一主義及び共同体主義の重要性を説く白人ナショナリストたちの実態を、インタビュウや集会への参加、雑誌等の分析などを通して炙り出したものである。著者は、二大政党への批判は共通するものの、「自由市場・最小国家・社会的寛容を重んじる」という点において白人ナショナリストたちと大きく異なる米国のリベタリアンたちを描いた『リバタリアニズム』の姉妹編として本書を位置づけている。米国における従来型の「保守／リベラル」という対立軸ではもはや米国政治の情勢を測ることはできなくなったという著者の問題意識が現れている。

著者は、白人ナショナリズムの問題を広く「人種的、民族的多数派による文化的反動」の一例として位置づける。そして、新興極右勢力「オルトライト」やその思想的源流の一人デヴィッド・デューク、白人ナショナリズムの歴史的経緯及びこれを巡る論争、そして海外の極右勢力との関係等について、順に考察がなされていく。そこから導き出される一つの米国の在り様が、他の集団を敵視し、自集団の利益のみを守ることを意図し、専門家の知見や手続きを無視することで力を誇示するような「強い指導者」を求める「政治的部族主義（トライバリズム）」であった。白人ナショナリストたちがトランプに親和的な姿勢を示しがちなのは、グローバリズムや人権・平等・多文化主義等を志向するリベラル国際主義という、「白人国家」と彼らが見なす米国のあり方を脅かすこれ

らの動きを、トランプが否定したからであると言えるだろう。その意味で、白人ナショナリストたちの動きも、トライバリズムの一例に過ぎない」と筆者は指摘する。

シャーロットヴィルのテロに関する報道に見られたように、テレビ報道等で見る彼らからは「マッチョ」な印象を受けがちである。実際、そのような集団も紹介されているが、本書で登場する人たちはむしろ知的で、瀟洒な印象を持つ人間も少なくなく、そのことにまず読者は驚くであろう。SNS等で「ヘイト団体」の認定を受け、アカウントを凍結されることも少なくない彼らの実態を、生の声を通して知る事の出来る本書は、今後の米政局を観察する中で、米保守の思想史を詳述した井上弘貴『アメリカ保守主義の思想史』と併せて、必読書になるに違いない。

#### ④ 田中研之輔著

##### 『ルポ 不法移民―アメリカ国境を越えた男たち』

岩波新書 (二〇一七)

トランプ政権が誕生した際に注目された発言として、「不法移民(非法移民)」の流入を止めるため、メキシコ国境に壁を建設するというものがあった。米国では、将来白人の人口比が五割を切り、相対的なマイノリティになる時代が来ると予測されているが、二番目に大きな存在として現れるのが、中南米系のヒスパニックである。正規移民も多い一方で、違法に国境を超え、労働を行おうとする不法移民たちの存在は、特にメキシコ国境に近い米南部で近年大きな問題となりつつある。本書は、著者がカリフォルニア大学バークレー校で研究員を務めていた二〇〇六年から二〇〇八年にかけて、中南米諸国から違法に国境を越えてきた不法移民たちと共に、彼らが日雇い労働の口を求め毎日集まるハースト通りにて仕事待ちを行った様子を描いたルポルタージュである。

著者は、フランス人の社会学者で、当時バークレー校で教鞭をとっていたロイック・ヴァカンの影響を受け、「身体ので変化を捉え、自身の

まなざしをととして社会の構造に迫る」「エスノグラフィー」の理論を学ぶべく同校に留学したが、その中で偶然出会ったのが、彼ら不法移民であった。著者は、数日間の観察の後、彼らのリーダー的存在であるフェルナンドとの関係を築くことに成功し、それから二年間、彼らと共に仕事待ちを行いながら、不法移民たちの生活の実態、アメリカの社会構造に斬りこんでいく。

本書に登場する、様々な理由で米国にやってきた不法移民たちは、決して自分たちを安売りせず、仕事の誘いを断ることも多い。だが、それは富裕層が彼らを安く使役しようとする現実の裏返しにほかならない。また、彼らには法の庇護が無く、たとえ暴行を受けても、警察等に助けを求めることはできない。むしろ、タナハシの著書にあるように、警察自身も彼らの敵として現れる。

そのような状況下で彼らは仕事待ちをするのだが、稼ぎは安定せず、本国への送りどころか、ホームレス同然の生活をしたり、ドラッグに手を染めたり、中には国外追放されるものも出現する。しかし、母国の情勢や家族との関係、低賃金等様々な理由から、彼らは再び米国に帰ることを選択するのである。

二〇一五年に筆者が再び通りを訪れた際、仕事待ちの人間は激減していた。しかし、彼らは、他の場所に移動した人間が多いだけであるという。そして、米国は貧困になり、仕事が減ったが、それでも我々は母国に帰ることはない、と述べる。少し昔のルポではあるが、不法移民たちの切実な現状、米社会の断絶や絶対的な貧富の格差を、生々しく描かれる彼らの言動から直接感じ取ることができるであろう。

#### ⑤ 日本移民学会編

##### 『日本人と海外移住』

明石書店 (二〇一八)

最後に扱うのは、日本からの移民である。近代日本の海外への集団移

住の先駆けは、一八六八年、ハワイ政府のリクルーターであったヴァン・リードが集めた一五〇人の「元年者」たちであるとされる。この移民は明治政府が正式に認めたものではなく（徳川幕府の渡航許可はあった）、<sup>ii</sup>「無許可」で連れ出されたと思なした政府が翌年に使節をハワイに派遣し、一部が帰国、一部が米国本土に移住、そして残り五十名以上がハワイに残存したといわれる。

その後、ハワイ政府の要請に応じた明治政府との協定による「官約移民」が、一八八五年から九四年まで続き、終了後は、民間の移民会社<sup>i</sup>が移民を取り扱うようになった。彼らは、「自由移民」として、ハワイ（九八年に米国に併合）、そしてカナダやアメリカ本土、ペルーなどへと送り出され、定住し、彼らの子孫がいわゆる「日系人」として世界各地で暮らしている。

本書は、日本移民学会が二〇一四年から一六年にかけて実施した公開講座「日本人と海外移住」の内容が書籍化されたものである。その内容は多岐に渡り、「移民」を研究することの意義や方法論、活用法についての議論の後、ハワイや米国本土、カナダ、ブラジル、中南米、満州、東南アジア、そして在日ブラジル人及び在日コリアンという「日本に対する移民」が個別に扱われる。日本人の各国への移民開始に関する歴史的経緯から、各国の日系人社会の成り立ちと位置づけについてまでが、多様なデータおよび画像、豊富なコラムと共に紹介されており、日本を取り巻く「移民」という現象を知る上で、非常に有用な書物であると言えるだろう。

では、本書評のテーマ「米国の人種問題」とは若干異なる主題を持つ本書をなぜ選択したか。それは、本学が所在する名古屋周辺には、在日ブラジル人が多数居住しており、ブラジル料理屋なども多数存在しているからである。彼らは一見すると、特に問題なく日本で暮らしているように見える。だが、バブル花盛りの一九八〇年代以降非熟練労働者として多数誘致された日系ブラジル人移民たちは、リーマン・ショック後、日本政府によって金銭的な見返りを餌に帰国を促されている。また、文

化的な違いから、近隣住民との文化的摩擦も起こっており、必ずしも平穏な生活を送っているわけではない。本書をきっかけに、まずは我々の身近に住む移民たちを知り、その後改めて米国、そして各地の人種問題について考えてもらいたいと思う。

i 川島正樹編『アメリカニズムと「人種」』名古屋大学出版会、二〇〇五年、i頁。

ii 例えば、ミネソタ大学大学院在学中の学生による以下のような現地レポートがある。

吉田晋也「ミネソタ大学の日本人院生が見た『フロイド事件』とその後の風景」現代ビジネス、二〇二〇年八月二十八日、<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/75114>

（二〇二〇年十一月三〇日アクセス）。